

補助事業を流用する 西別川取水計画の内実

ルポライター
滝川 康治



農業補助事業の功罪論議が高まるなかで、「摩周の水」を釧路町に引く計画が進む。事業の流用ぶりを検証し、環境や一次産業への影響を考える。

営農用を飲用主体に変更

釧路市の繁華街から国道391号線を北に15キロほど行ったら、釧路湿原の一角に「国営農地開発事業トリトウシ地区岩保木圃場」と書かれた看板が立っている。ここはラムサール条約登録湿地に隣接した国立公園の普通地域。開発規制が緩やかなために、道開発局

と膨れ上がった。

この取水事業について、釧路開建は「あくまで地元の要望や申請に基づいて計画変更を行った」（農業開発課と説明。釧路町では、「うちは道内有数の人口の伸び率で、75年に1万人弱だったのが現在は2万1000人。今年は、最も水を使う大晦日に時間給水が予想されるほど需要が伸びているが、町内に適当な水源がない」（出村仁志水道課長）と、水需要の伸びに対応する事業だと強調する。

ところが、釧路町の基盤整備のために全く異なる水系に影響がおよぶことから、環境悪化を心配する住民や漁業・自然保護団体などの反発を招き、計画

り、農家は数軒あるだけだ。この湿原の農地化を含めて、釧路町の飲料水と同町北部の畑作・酪農地帯のかがい用水などの確保のため、西別川からパイプラインで日量2・2万トンの水を引く——というのが、トリトウシ地区国営農地開発事業」の骨子（地図参照。関係者の話や新聞報道などを総合すると、次のような経過をたどってきた。

86年に農家の経営規模拡大を目的に同事業がスタートしたときは、総事業

は町長にも提言した。それが町民に内緒で（他町などと）協議を進めてきたことに問題がある。漁業団体の反発をかむために取水地点をずらしたと聞くが、町は議員にすらその場所を示さない。源流の湧き水から取らなければ、釧路川の水と同じだ」

環境悪化を憂慮する人々

西別川の麓から湧き出る清冽な水は、すでに標茶・別海両町の飲料・営農用水として供用中であり、2カ所のふ化場と民間の3養魚場をも支える。地元の人によると、西別川源流部ではシマフクロウの生息も確認されたといひ、豊かな自然環境が残されている。それだけに取水計画には神経をとがらせ、昨年春には虹別連合振興会（天浦忠雄会長・約280戸）が町に「反対表明書」を提出。これらを受けて標茶町議会は今年3月、住民の反対請願を採択して、態度を鮮明にした。

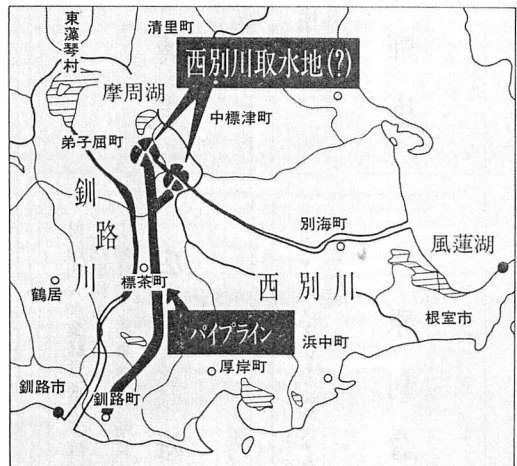
背景に農業行政の遅れ

地域の交遷を見つめてきた岩保木の農家は、「電気が引かれ、道路が良くなり、そして人間がいなくなった」と覚めた口調でこう話す。

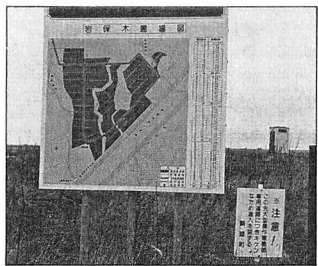
「農業用水といつても微々たるもの。それを名目に人の飲み水を確保するのが本当じゃないのか。釧路町の農家は規模も小さいし（国営事業の）数百万円の借金だって困るだろうに……」

天寧地区の受益者の一人で、75頭ほどの乳牛を飼う中堅酪農家・工藤得一さん（釧路町議）は、この事業に夢を抱いてきたが、最近はその姿勢に疑問を感じようになった。

「僕らには計画変更の経過は全く知らされず、89年の春ごろ突然、開建から提示があった。摩周のきれいな水を使えば地元のダイコンやブロッコリーの商品価値も上がるし、安全な水が供給されてメリットがある——と、僕



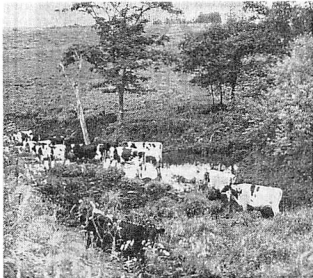
西別川の水を釧路町まで引く道開発局の取水計画図



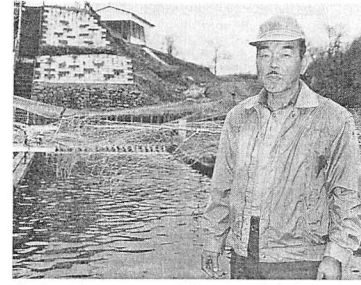
釧路湿原に立つ「トリトウシ地区国営農地開発事業」の看板



西別川源流部では、すでに標茶・別海両町が取水中



放牧牛による糞尿も河川汚濁の一因に (西別川の支流で)



清流でDonaldsonを繁殖する鈴木兼好さん (標茶町虹別で)

「今の西別川は浅いところなら長靴で渡れるが、昔は深くて簡単には横切れなかった。川魚は開拓当時の貴重な白源だったし、1m以上のイトウもいたけど、今じゃヤマメもほとんどない。水源地の森林を伐つたり、草地造成を行ったせいで、自分たちにも反省するところがある」

と水量の変遷を振り返り、「たとえ取水地点を変更しても水量減につながる計画は認められないし、農業予算を別の事業に安易に使うべきではない」と力を込める。

西別川は根釧原野をゆつくり蛇行しながら根室湾に注ぐ。虹別周辺では清流を誇っているが、下流に行くにした

の変化などのアセスメントを10〜15年単位で行うべきだ。

③一方で釧路湿原を破壊し、他方で根室の河川環境の劣化をもたらす。農業予算は農民に還元されるべきだ。と、改めて計画の中止を求めた。

「政治的に決められた開発事業が何よりも先にあり、その後、つじつま合わせがなされた。ゼネコン汚職で明らかのように札幌攻勢は地方の首長にも向けられ、必要のない事業が乱立して環境破壊を引き起こしている。この計画でも、某政治家の介在によって当初の事業費が4倍近くにまで膨らんだ、と聞いている」

と、利権に群がる政治家の影について、同会事務局長の岡井健さん(獣医

がって水質が悪化する。農地開発による河畔林の減少、酪農施設や農地からの土砂や富栄養化物質の流入などが原因という。水量減は川の汚染に拍車をかけてしまう。

北大環境科学研究所の水質調査結果によると、西別川の支流が本流に合流するたびに、化学肥料や糞尿に起因するとみられる硝酸態窒素の値が高くなる。完熟堆肥を草地に戻す循環型の酪農ならば「乳と蜜の流れる郷」が実現するのだが、「ゴールなき拡大」をうたう大規模酪農によって根釧原野が蝕まれているのが悲しい現実である。

別海漁協(早瀬民夫組合長・約100戸)の青年部は、77年から西別川筋10カ所の水質調査を毎月つづけており、汚染に敏感に反応してきた。同漁協は取水計画について苦慮しているものの、さまざまな内部事情もあって正式な態度表明に至っていない。

漁師歴30年あまり、同漁協理事の大橋吉太郎さんは、取水計画を疑問視する一人である。

「清流水がバランスを取れてこそプラシントンの培養が促される。根室・野

師)が疑念をさしはさむ。

同会は北海道自然保護協会とも歩調をそろえて、議会に対する働きかけやシンポジウムなどで反対世論を盛り上げていく意向で、漁業団体の動きと相まって台風の目になりそうだ。

見切り発車避けて議論を

事業者や関係自治体、漁協などによる取水計画をめぐる協議は断続的に行われおり、開発局は西別川流域の植林や糞尿問題の改善などを示して事態打開を図ろうとしている模様だが、11月末現在、結論をみていない。

こうしたなかで別海町の態度表明が注目されるが、佐野力三町長は「環境と水質保全上から取水には基本的に反

付両半島に囲まれた内湾では、西別川や風運湖などの淡水の張り出しが好漁場をつくってきた。わたしは「取水は未来永劫に駄目」と言っているんじゃない。海と山が協力して開発のしすぎを改善し、西別川に力がついたときには取水できるでしょう。今はまだ時期尚早なんです」

と、自然の摂理を守った環境保全の大切さを説く。戦後、国後島から引き揚げてきた当時は、河口近くの西別川の水がそのまま飲めたとか。大橋さんは、漁業振興に奔走してきた人生をわたしに話してくれたが、そんな歩みが取水に傾る原動力になっている。

北海道指導漁連根室支所の吉田東海雄所長は次のように話す。

「素人目にも、なぜ釧路川から取水しないんだ」と感じる。西別川からの取水が好ましくないのははつきりしており、我々の立場からは基本的に反対です。もし地元漁協が賛成しても、それイコール管内組合長会などの見解ではありません」

漁業関係者に合意を求め、事業者側が取水を実現するのは、決して平坦な

対。が、独自水源がないなど釧路町の事情は同情できるものがある(「議会答弁から」と、取水やむなしの判断に傾いている。西別川水利検討協議会の座長を務める伊藤正幸助役の話は、

「水量減少やサケ・マス増殖事業への影響などについて、開発局などが今年初めから改めて調査しており、12月中旬にも結論が出されるのではないかと。その結果や町民や農漁業者の意向を踏まえないと、町として判断できない」

と歯切れの悪いものだった。代替水源としての釧路川の利用ひとつをみても、議論がかみ合わない。釧路町は、「自然保護団体が主張する釧路川からの取水は」調査期間も長引くだろうし、当町の水需要のスパンに合わない。独自水源の確保は差し迫った問題(水道課と強調するが、釧路市は「2005年度までの水道計画でも、両市町の水道使用量の伸びに対応できるだけの備えはある」(7月3日付『北海道新聞 釧路根室版』)と、現状認識に大きなずれがある。

同町が主張する水問題の緊急性をめぐる情報が、西別川水系の住民などに

道りではないようだ。

利権に群がる構図も?

計画に住民サイドから異議を唱えているのが、別海町の「バラサンの会」(高橋昭夫代表約150人)。90年に町内の次散沼にリゾート計画が持ち上がったのを契機に発足し、その計画を中止させた実績をもつ。農業を中心にした地域振興のあり方、自然探勝、環境保護の3本柱で活動するなかで西別川の取水問題にぶつかり、計画見直しを訴えてきた。

8月下旬、同会は釧路町や釧路開建などに要望書を提出した。

①農業用水はオヒラシケ川の水量で十分確保され、上水は釧路市からの分水で可能。釧路町は国立公園の規制などを理由に釧路川からの取水に難色を示すが、環境庁の幹部職員は「さほど問題なく認可されるだろう」と述べている。また、釧路市との合併が実現すると上水問題も解決する。

②取水地点の変更で、ふ化場が使用する化学物質の排出による安全性が考慮されていない。取水による河川機能幅広く公開されていないことも、共通理解が得られない一因のようだ。こうした傾向は釧路開建に顕著で、わたしの取材要請に対しても、

「事業の進行状況や水質調査結果、着工時期などについて、いろいろと調整中なのでコメントは勘弁してほしい。取水地点は釧路町の方で聞いてください」(浅井要治治農業開発課長)

結局、何ひとつ明らかにしようとしなかった。この計画では、農民向けの補助事業に一般の上水確保をドッキングさせたところに、ポタンの掛け違いが始まっている。取水目的について、牽強付会とも受け取れる説明があったり、開発行政特有の秘密主義が住民の不信感を招く場面もあったようだ。

着工を見切り発車させ、豊かな自然環境と一次産業を失つてからでは取り返しがつかない。事業者側は計画内容などを住民にきめ細かく説明する努力を怠ってはなるまい。水源確保に躍起となる前に、足るを知る心を呼び起こし、冷静に道東の将来像を議論しあう